

今晚、わたしたちは十字架上の主に招かれて、ここに集っています。

灰の水曜日から始まった四旬節の間、わたしたちは信仰における回心を心がけてきました。わたしたちの信仰における回心とは、わたしたちが信じている神のもとに立ち返ることです。四旬節、そして迎えた過ぎ越しの聖なる三日間のこの季節、わたしたちがそのみもとに立ち返るべき神は、十字架のお姿をもって、わたしたちを待っていてくださるのです。その十字架のお姿をもって、神はこの世に生きるわたしたちに、ご自分の全てを啓示してくださったのです。

わたしたちが信じる神は、全てのものに先立って存在する、全てのものの創造主である神です。けれども、そうであるなら、創造主である神を信じるわたしたちは、どこまで、世界の創造主である神と、その被造物としてのわたしたちの関係を真面目に受け止めているのでしょうか。現代に生きる信仰者であるわたしたちは、わたしたちが信じる神と、わたしたちの世界のこのような関係を直視しなければなりません。わたしたちの日々の生活を振り返って考えてみても、わたしたちが信じているはずの神と、神を信じているわたしたちの生活の間には、引き裂かれた神とわたしたちの関係が横たわっていることを認めざるを得ません。

けれども、神とわたしたちの間のこのような引き裂かれた関係は、今に始まったことではありません。聖書をその最初から読み返してみるなら、創造主である神と、創造主である神の似姿として創造されたはずのわたしたち人間の間には、その始めからこのような引き裂かれた関係が横たわっていることが分かるはずです。アダムとエワの失楽園の物語からも分かるように、聖書はその全体を通して、創造主である神とその被造物である私たち人間の世界のこのような引き裂かれた関係の歴史を語っています。聖書は、自分たちの世界から創造主である神を締め出すことによって、わたしたちが引き裂いてしまった神との関係の歴史、創造主である神に対する人間の罪の歴史を語っています。と同時に、それにも関わらず、そのようなわたしたちを、御自分との関係に呼び戻そうとする神の、関係修復を求める試みの歴史をも語っているのです。洪水とノアの箱舟の物語も、バベルの塔の物語に続くアブラハムの召命の物語も、出エジプトの出来事も、そのような神からの働きかけの歴史として語られているのです。旧約聖書の中心をなす、シナイにおける神の契約に与って、神の民とされたイスラエルの民のその後の歴史は、まさに、創世記から始まる神と人類のこのような歴史の典型として語られているとも言えます。

わたしたちが洗礼によって受け入れたキリスト教の信仰は、旧約聖書に示されている、神とわたしたちの世界のこのような歴史の延長線上に、神が示された究極の人類に対する関係修復を求める姿として、イエス・キリストの十字架を示しているのです。それなら、イエス・キリストの十字架において、神はどのようなことをわたしたちにお示しになっているのでしょうか。

五年を経過したあの地震と津波の被害による原発事故の報道を見ていて、今なの、故郷に戻ることでできない被災地の方々はもちろんのこと、多くのわたしたちが最も積然とした思いになれないのは、これほどの事故の責任の全てを負うことの出来る人が、どこにもいないということです。歴代の政府の責任者も、電力会社の経営責任者たちも、この事故の責任をどう取れるというのでしょうか。被害に遭った方々が求めていることは、せめて、この事故によってもたらされた自分たちの苦しみを本当に受け止めて、それにふさわしい謝罪をしてほしいということです。けれども、この世界の人間に過ぎないその時々々の責任者たちが、それらの人々の苦しみの全てをどうしたら本当に受け止めることができると言うのでしょうか。それを本当には受け止めきれない人間に過ぎない者たちが、謝罪することにどのような意味があると言うのでしょうか。どんなに保障を積んでも、決して元の生活には戻れない保障とは何であるのでしょうか。あの災害を経験して以来わたしたちは、わたしたちの歴史が経験してきた、わたしたち人間の力だけに頼って作り上げてきた世界が抱える、持って行き場のない憤りと悲嘆の袋小路を経験しているのです。

イエスの十字架は、そのようなわたしたちの世界の真の創造主である神が、この世界の最終的な責任を負う者として、自らを十字架の上に曝しておられる姿に他なりません。それが、わたしたちとの関係修復を願う、この世界の真の責任者としての、わたしたちすべての者の創造主である神の、この世界に対する究極の誠意に満ちた愛のお姿なのです。

何故、わたしたちの主であるイエス・キリストは人となられて、十字架の上に死なれたのでしょうか。わたしたちが信じるわたしたちの主であるイエス・キリストは、人間であるわたしたちの苦しみ、悲しみの全てを味わうことのできる場に自らを置くために、十字架の死を選ばれたのです。十字架の死はわたしたち人間が味わうあらゆる生理的な苦しみの限界の死です。その全ての苦しみを、身をもって味わうために、一人の人となられた神は十字架の死を選ばれたのです。イエス・キリストの十字架の死はわたしたちが経験する肉体的な苦しみへの、神の連帯を示すだけではありません。十字架のイエスは、神から遣わされたメシアとして、この世の権力闘争に巻き込まれ、敵対者たちの憎悪の

的となって、その闘争に敗れた者として、人々の侮蔑を一身に浴びて、十字架の死を迎えられたのです。弟子たちからさえ見限られた者として、その心のうちの思いを誰にも理解してもらえない孤独のうちに、十字架の上に死なれたのです。「わが神よ、何故私をお見捨てになられたのですか」との叫びを挙げざるを得ない絶望の死を経験されたのです。

何故、神その方であるわたしたちの主イエス・キリストはこのような十字架の死から身を引こうとはなさらなかったのでしょうか。わたしたち人間がおおよそ経験し得る、全ての苦しみの淵に身を置くことによって、この世界の苦しみの淵に突き落とされた者たちの側に身を置いて、その苦しみに寄り添うためです。その苦しみの意味を問い、その苦しみの責任を求めるわたしたちに、その十字架の姿をもって、この世における全ての事柄の最終責任者、創造主である神としての謝罪を申し出て、和解を求めるためです。本当は自分たちのせいで、この苦しみの世を作り出してしまい、その中であって、悲痛な苦悶の叫びを上げているわたしたちをその懷に抱きしめようとして、神は十字架の死のお姿をもって、この苦しみの世界にその愛のお姿を示してくださったのです。

これから行われる十字架崇敬の儀で、あらためてイエスの十字架のお姿をしっかりと心に刻みたいと思います。そして、わたしたちがこの世で経験する全ての苦しみの中に、わたしたちが信じる神、十字架の死を超えて復活されたイエスがともにいてくださることに気付くことのできる信仰の恵みを願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高